

授業で使える当館所蔵地図

No. 19 『世界一景 岐阜長良川鵜飼鳥瞰図』

作成年：1935(昭和 10)年

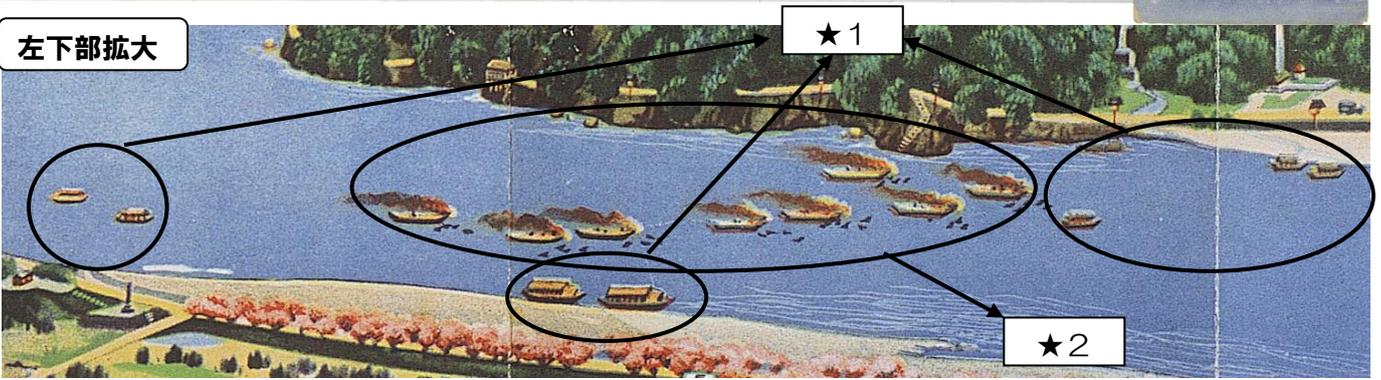
サイズ：14×50 cm

作者：吉田初三郎

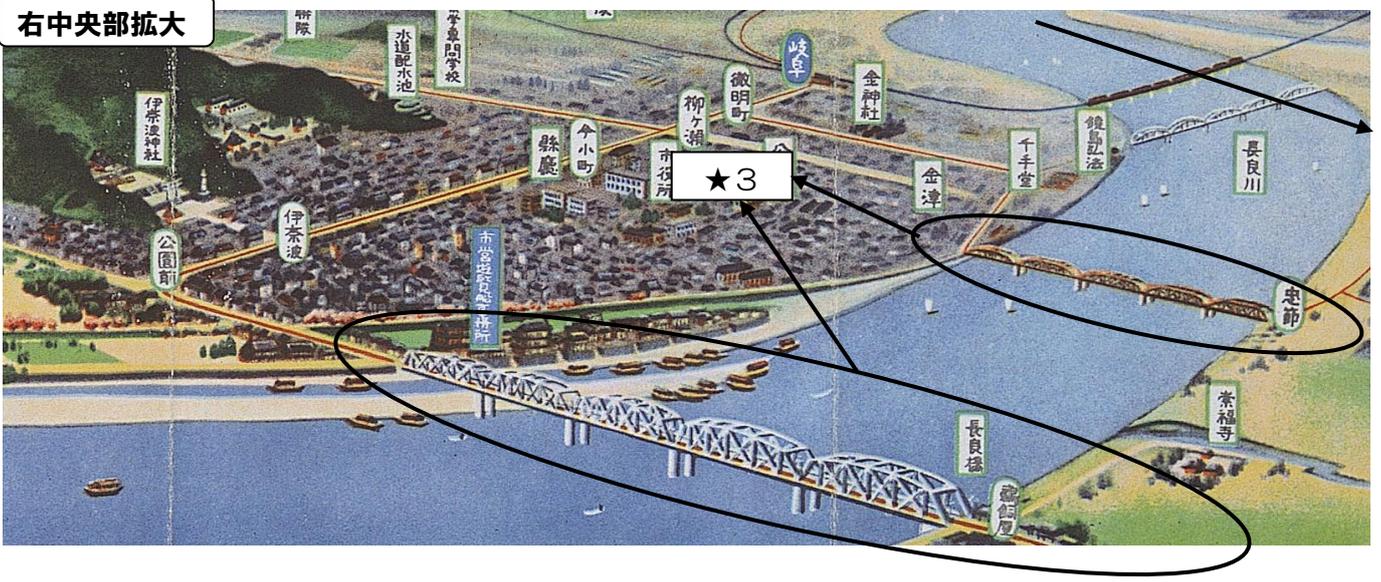
原 図



左下部拡大



右中央部拡大



【解説】

岐阜市のシンボルは岐阜城であり、清流長良川の鵜飼である。初三郎の眼もそこにあつて、岐阜城のそびえる金華山を中央に大きく描き、長良川で包むがごとくにし、その正面にかがり火を焚く鵜舟を並べ、そこへ乗船場や対岸の旅館から観客を乗せた船が次々と集まる風景が描かれている。

金華山の麓には岐阜公園、名和昆虫所、三重塔などがあり、市街中央には県庁や公会堂などの建物が見られる。岐阜駅や乗船場は青で示され、手前の右岸には桜並木があり、岐阜商業学校や師範学校、護国寺もみられる。

★1 鵜飼観覧船

長良川に遊船ができ、一般客に見せるようになったのは、明治以降のこと。明治8（1878）年の記録には遊船渡世船というものがあり、このころにお客に応じたと考えられている。明治維新以後、鵜匠の生活が楽でなくなると、その打開策として遊覧船の経営が行われるようになった。明治30（1897）年には、遊覧船が37隻にまで増え、旅館や料理店が遊船をつくって、自分の家のお客を誘うようになった。翌31年には、岐阜市河原町橋東に鵜飼遊船株式会社創立事務所が開設され、岐阜市が鵜匠に補助金を与えることになった。これによって、今までは漁業中心であった鵜飼が、観光としての値打ちが高まったのである。その後、昭和2年には岐阜市に移管され、市営事業として現在に至っている。

★2 鵜舟（鵜匠）

江戸初期に長良に14艘あった鵜舟は、鵜匠の困窮のために、江戸中期に7艘に半減し、14人の鵜匠で操業を続けた。その後、享保14（1729）年になって、7人の鵜匠が廃業した。明治期に入り、有栖川家の御用を勤めたり、鵜飼保護の関係者の理解を得たりして、鵜匠は、明治23（1890）年に皇室の保護を受け、宮内庁に所属することとなった。

鳥瞰図には8艘の鵜舟が描かれているが、明治20年代から今日まで、長良の鵜匠は6家であり、鵜飼は6艘の鵜舟で操業してきた。（御用鵜飼中、貴賓者の観覧があるのに備えて、ほかに1艘管理していた鵜舟もあった。）

★3 長良橋 忠節橋

長良橋は、明治7（1874）年に架けられた。木造で南側から途中までしか橋がなく、途中からは舟の上に木板を渡した舟橋であった。当時は明治7年に作られたため、「明七橋」と名付けられた。その後、3度の架けかえが行われた後、大正5（1916）年に鉄橋で作られた。現在の橋は、昭和29（1954）年に竣工したものである。忠節橋は、明治17（1884）年に架けられた。鋼鉄製になったのは、昭和23（1948）年に竣工した現在のものである。鳥瞰図が描かれた当時の2つの橋を見比べると、木製の忠節橋と鉄製の長良橋の違いがよく分かる。

現在、長良橋と忠節橋の間には金華橋が架かっている。金華橋は、昭和39（1964）年に、翌年に行われた岐阜国体に合わせて竣工した。

【活用の例】

○鵜飼の歴史について関心をもつことができる。

→鵜飼や、鵜飼観覧の歴史がおよそ80年前にはあったことが分かり、いつから始まったのかについて、さらに調べようとする意欲を喚起することができる。

- ・「かがり火を焚いた鵜舟」「鵜舟の周りにある観覧船」がある。

※鵜舟の数については、解説をする必要がある。

○当時の金華山、長良橋周辺の様子について知ることができる。

→長良橋周辺の様子について、現在の様子との違いに気付くことができる。

- ・金華橋が架かっていない。
- ・長良橋と忠節橋の色の違いから、橋の材料の違いがある。
- ・長良橋周辺には、当時から旅館街があったこと。